令和６年度　府立海洋高等学校　学校経営計画（スクールマネジメントプラン）（　計画段階・実施段階）

学校経営方針（中期経営目標）

家庭・地域社会及び関係機関との連携を図り、自ら課題を発見し解決する能力を備えた、未来を切り拓き地域創生に資する水産・海洋のスペシャリストを育成する。

（重点・新規項目）

1　新学習指導要領・観点別評価（完成年度）の円滑な実施
2　生徒１人１台学習用端末（完成年度）の円滑な利活用
3　「第２期 京都府教育振興プラン」「府立高校の在り方ビジョン」「魅力ある府立高校づくり推進基本計画」「スクール・ミッション」等に基づく学校経営及び「スクール・ポリシー」の趣旨を踏まえた新しい学校づくりの構想
4　学校運営協議会の取組も踏まえた地域創生に資する人材育成
5　研修旅行の成功
6　仮設舎室を含む寮の適正な運営及び下宿との連携

前年度の成果と課題

（成果）

1　家庭との連携及び教育相談会議やケース会議等の実施による個に応じた支援で、寮（仮設舎室）、下宿を含めた生徒の生活を安定させている。
2　進路について、地元の水産・海洋関連産業に20名超が就いた他、海上保安学校等の公務員も含め、ほとんどが学習内容を深化・発展させる分野に進んだ。また、国公立大学31年連続合格（難関国公私立大学にも複数が一般合格）を始め、スポーツ推薦や水産・海洋関連分野以外を含めて、幅広い分野の大変質の高い進路実現を果たすことができた。
3　実践的な教育活動により、本校の持ち味を生かした研究活動に取り組むとともに、教育長表彰に57％該当、マリンマイスター顕彰対象生徒も卒業生の７割が該当（全国2,500人のうち上位11名に、本校から８名（特別表彰））するなど、レベルの高い資格を取得する生徒数が持続し、大会やコンテスト等への出場・入賞でも実績を積んでいる。
4　ほとんどの生徒が何らかの部活動に加入し、高校生活の充実に努めた。高校新・ジュニア新に留まらず、日本新記録樹立を達成した部活動もある。複数の部活動で、府・近畿・全国大会及び国際大会出場や入賞の実績を重ねている。
5　生徒会活動並びに図書館活動の充実により、生徒が多様な価値観をもち、学習・研究活動の幅を広げている。
6　宮津商工会議所との連携協定によるキャリア教育や、学校運営協議会による地域の魅力を感じさせる教育活動が継続できた。
7　地域魅力理解、感染症対策、学習用端末購入に伴う負担増を軽減する、新しいスタイルの研修旅行が実現できた。
8　キャリアプランニング・サポート（小、中学校への学習・体験等提供）並びにコラボ推進プログラム等に、府北部を中心とする多くの児童・生徒が参加し、本校教育内容への動機付け並びに水産・海洋分野への理解を深めてもらうことができた。

（課題）

1　完成年度となる新学習指導要領・観点別評価及び生徒１人１台学習用端末活用の充実
2　生徒、保護者等と教職員との信頼関係構築の一層の推進及び中学生、地域の方等から信頼され、憧れの対象となる人権感覚を備えた教員像の確立
3　地域連携の一層の推進と研究（探究）活動等の充実により、地域活性化意識を醸成する教育活動展開及び進路実績の継承
4　中学生及びその保護者等から求められる学校像の構築と、目的意識の高い志願者数確保に繋がる迅速かつ効果的な教育活動の発信及び広報活動の実施
5　業務の整理や効率化による諸取組の適切な実施及び働き方改革の推進
6　ボランティア活動や学校公開等、コロナ禍以前の特色ある取組の適切な実施や更新
7　下宿・家庭・寮（仮設舎室を含む）での好ましい生活の支援
8　「スクール・ミッション」や地域ニーズに応え、中期経営計画を具現化する新しい教育内容の構築

本年度学校経営の重点（短期経営目標）

1　普通・専門教育の充実と希望進路の実現

(1)生徒１人１台学習用端末の活用を基にした、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげる。
(2)授業（実習）改善と海洋プロジェクトの充実により、進路の選択・決定における自己実現を支援する。
(3)地域人材を活用したキャリア教育や外部機関等とのつながりを充実させることで、府北部活性化のために何ができるようになるかを展望させ、地域創生に結びつける。
(4)思考力・判断力・表現力の醸成を基に、校内外の連携や課題の共有に努めながら、活動の質をより向上させる。
(5)読書活動・図書館活動の充実を図る。

2　基本的生活習慣の定着

(1)生徒指導提要の改訂を踏まえ、「生徒心得」等生徒指導の考え方を共有し、一貫した指導体制の確立を図るとともに、それぞれの課題に応じた指導を推進する。
(2)道徳性や規範意識を大切にし、人権感覚を前提にしながら、状況に応じた行動（ふるまい）ができる人間性を育む。
(3)成年年齢引き下げを踏まえ、社会人としてより一層責任と自覚ある行動を促す。

3　心の育成

(1)系統的な人権教育により、生活の中に生かされる指導を行う。
(2)日常的な声かけに努め、成長を確かめ合いながら自己有用感を育む。また、主体的な行動を促し公共心を育成する。
(3)互いの個性や多様性を認め合い、生かしながら共に学ぶ仲間づくりを進める。

4　安心・安全・衛生管理の徹底

(1)実習（実習船含む）に常に緊張感を持って臨むとともに、点検・確認や円滑な情報伝達及び共有を怠らず、安全第一を徹底する。
(2)生活全般において法やルールを守り、他者を思いやる気持ちを行動につなげる能力や態度を育成する。
(3)感染症対策で得られた対策や対応の手法等を継続する。

5　広報活動の充実と家庭・地域との連携強化

専門学科や進路、部活動等の取組を中心とする迅速かつ積極的な広報に努め、本校の魅力を発信、アピールする。

6　職場改革の推進

(1)職員それぞれが職務にやり甲斐を感じ、Well-beingの実現が図れるよう職場環境の改善を図る。
(2)DXの推進等を通じた働き方改革により、生徒と向き合える時間を確保するとともに、学校職員としての資質向上に努める。
(3)職員がお互いを慮り合いストレスの軽減に務めるとともに、業務の共有・協働・分担、分掌等の枠にこだわらないOJT、スキルの伝承を推進する。

令和6年度京都府立海洋高等学校　学校経営計画（スクールマネジメントプラン）　実施段階

分掌・教科等	重点目標	具体的方策	評価			成果と課題
組織・運営	個に応じた指導の推進と指導状況の共有等を通じ、教育活動の充実を図る。	・学校経営計画の各評価領域の具体的方策について、目標に対する進捗状況を点検・共有等することにより、高い達成状況を実現する。	A	A	B	・年度末評価に向け、各分掌、学科・コース、教科の進捗状況について高い達成状況を目指すために、日頃からの確認をさらに進める。
	本校の魅力を積極的に発信するとともに、志願者数の増大を図る。	・特色ある教育活動を推進し、専門教育の内容をさらに充実させるとともに、志願者数を増加させ、定員を充足させる。また、教育内容についての広報をさらに充実させる。	B	B		・特色ある行事毎に各報道機関等に取材依頼をしたが、昨年度に比べ減少している。今後、適切なタイミングでの取材依頼に努め、広報活動の活性化に努める。 ・前期選抜定員が59名のところ、90名の出願があり、志願倍率は1.53倍であった。さらに、中期選抜定員23人のところ、33人の出願があり、志願倍率は1.23倍であった。次年度以降も多くの中学生が志願するよう、広報活動をさらに強化する。
	職場環境の改善を図るため、働き方改革を推進する。	・行事及び業務の焦点化や精選、分掌業務の平準化や協働等により、時間外勤務時間の短縮を図る。	C	C		・今年度４月から12月までで、教員全体における平日時間外労働時間月60時間超の延べ回数は、昨年度44回から今年度29回へ減少した。また、その割合は7.3%であった（昨年度11.1%）。さらに、「過労死ライン」とされる月80時間超は延べ回数は11回、実人数は４名であった。今後、さらなる業務の精選や協業、効率化等により時間外労働時間を縮減させなければならない。また、思いやり週間やノー残業デーの在り方の再考を含め、さらなる時間外労働時間の縮減を目指す。
総務企画部	専門学科や進路、部活動等の取組を中心とする中学生目線を基にした積極的な広報に努め、本校の魅力を発信、アピールする。	・「ホームページ・広報資料・学校説明会」を軸に、受け手（保護者、中学生等）を意識した内容の精選やＩＣＴ化等を図りながら、本校の魅力を効果的に発信する。	A	A	A	・学校説明会アンケート結果 第１回「よい」95%、「ほぼよい」５％ 第２回「よい」100% 第３回「よい」93%、「ほぼよい」７％ ・今年度より６月に施設見学会を新規に開催した。学校説明会等の申込方法はweb（Google Forms）に完全移行した。ｱﾝｹｰﾄもwebにすべて切り替えたが、回収率が低く次年度に向けて検討を要する。時代にマッチした広報活動が志願者数の増加に繋がると思われる。
	系統的な人権教育により、生活の中に生かされる指導を行う。	・系統的な人権教育を推進するために、次の４項目を掲げる。 ①計画的な人権学習(5回)・人権講演会(4回)の実施 ②人権だよりの発行(7回) ③文化委員会の人権啓発の取組 ④道徳教育取組まとめ	A			・＜実施状況＞ ①人権学習３回、人権講演会３回 ※教職員研修（同和問題） ２月19日（水）実施予定 ②人権だより（年５回発行） ③オッドソックスデーの実施 （一人一人の違いを尊重し、いじめ撲滅を目指す取組） ④道徳教育のまとめ（３月作）予定 ・本校で初めてオッドソックスデーに取り組んだが、生徒・教職員共、参加率は低かった。次年度は多くの人に共感・賛同してもらい、参加率を向上させたい。

令和6年度京都府立海洋高等学校　学校経営計画（スクールマネジメントプラン）　実施段階

分掌・教科等	重点目標	具体的方策	評価			成果と課題
教務部	カリキュラム・マネジメントの推進により教育活動の質を高め、学習効果の最大化を図る。	・新学習指導要領に基づき、より適切な学習評価に留意した年間学習指導計画や指導シラバスを編成し、各科目の円滑な授業進行を目指す。	B	B	B	・カリキュラム・マネジメントの一環として、教科担当を対象に「教科指導に関するアンケート」を１月下旬に実施し、教科担当が年間指導計画どおりに授業が進んでいるか等を確認した。その内容を踏まえ、令和７年度年間学習指導計画の立案に反映させたい。
	新学習指導要領に基づき、より適切な観点別評価の実施と教科指導力の向上を図る。	・公開、研究授業への参加や、観点別評価等の新学習指導要領への円滑な実施を目的とした研修を実施し、教員の指導力と生徒の学力向上を目指す。 ①公開、研究授業への参加１人当たり３回以上。 ②観点別評価に関する資料等の情報提供及びメンション４回以上。	A	A		・全２回の公開・研究授業では教員１人当たり3.7回参観、教員の参加率は94%だった。今後は参観時の観点をさらに工夫して学習評価のスキルアップに繋げたい。 ・観点別評価に関わる研修を兼ねた教科主任会議を５回実施、全学年すべての科目に関わる観点別評価の概要を作成、さらに、日々の授業における観点別評価の具体例をすべての科目で実施、Teams等でメンションした。今後もより適切な学習評価を目標に、研修等を推進したい。
	端末機器等のＩＣＴ活用を推進し、社会のデジタル化への対応力を高める。	・教職員のＩＣＴ機器の活用を推進することで、生徒の授業理解を促し、生徒の学力向上に繋げる。 ①ＩＣＴ機器活用に関わる参集型研修やメンション８回以上。 ②学習時間伸長に向けた学習時間調査を学年部や学科・コース、部活動等で推進し、入力率70%以上を目指す。	C	C		・教職員を対象に採点ナビの参集型研修を１回、情報共有を９回実施した。今後は採点ナビの活用推進や学習用端末の基本操作に関わる情報共有、研修を企画したい。 ・年間を通じて中間考査での学習時間調査の入力率は約60%、期末は50%だった。入力率が低迷していることから、生徒自身による学習計画の立案や実施管理の方法を改めて検討し、学習用端末のより有効な利用を推進、指導したい。
	読書活動を通してことばの力を高め、豊かな思考力を醸成する。	・読書活動を推進して生徒の健全な成長を促すことで、学校生活をより充実したものとする。 ①50%以上の授業科目で図書室活用による探究活動を推進する。 ②司書主催で、教職員に対する働きかけ（教職員向け図書館だより・図書館研修等）を５回以上行う。 ③図書室で１冊以上本を借りた生徒の割合85%以上。	B	B		・各科目（教科担当）による図書館利用は20%だった。教科担当に向けて、図書室の具体的利活用の実践例等を示しながら利用推進を図りたい。 ・教職員対象の研修を３回、図書館だよりを２回発行し、教職員への働きかけを増やした。 ・図書館で１冊以上本を借りた生徒は96%だった。目標数値を大きく伸ばすことができたので、今後は図書委員会等の活動を通じて貸出冊数を増大させたい。

令和6年度京都府立海洋高等学校　学校経営計画（スクールマネジメントプラン）　実施段階

分掌・教科等	重点目標	具体的方策	評価			成果と課題
生徒指導部	学校生活の中での基本的なルールや規律を守る意識の醸成を図る	・８時25分までの登校を促し、基本的な部分から生徒指導を見直していく。	C	C	C	・昨年度に比べて、８時25分までに登校できない生徒の数は大きく減少してきていると感じる。遅刻の数が増えがちな生徒に対しては粘り強く声掛けを行い、生活面での改善を促した。
		・頭髪・服装指導を強化するとともに、指導の意義についても理解させる。	C	C		・今後も啓発、指導を継続し違反件数の減少を目指したい。
	ＩＣＴ機器利用指導を確立する。	・１人１台端末の完成年度に伴い、ＩＣＴ機器のよりよい関り方について、ルールを明示し、指導していく。	D	D		・今年度は学習用端末の不正使用についての報告は何件かあった。今年度の問題事象を整理して、新たなルール作りを進めた。
進路指導部	海洋プロジェクトを基軸とした、３年間を見通した進路指導を実現させる。	・各種行事等での満足度の向上に努める。	C	C	B	・キャリア講演会や分野別進路学習で概ね満足できたという回答は75％であった。企業訪問や各種学校の教職員が来校するなど、外部との直接的な学びの場の増加により将来の生き方に関する生徒の理解は深まったが、多様化する生徒の進路に対応するためには更なる工夫や改善が必要である。
	学習用端末を活用したキャリア教育を推進する。	・学習用端末を活用したキャリア教育の講義や研修の実施回数を増やす。	A	A		・学習用端末を用いた補習やキャリア講演会、スタディサプリの小論文講座を活用した表現力の向上や、活動のメモによるメタ認知の向上に努めた。また、スタディサプリの到達度テストをwebで実施することにより、結果と課題克服のための対策を学習用端末で把握できることにより、個に応じた学びが実現できる学習環境を進展させることができた。
保健部	学校生活を「安心・安全」に送ることができるよう継続的な感染予防を定着させる。	・各分掌と協力し学校生活の中での継続的な感染症予防対策の定着を目指す。 ・検温や健康観察、出欠席など生徒の健康状態の把握を効率的に行い、持続可能な予防対策の定着を目指す。	B	B	B	・２学期以降にインフルエンザ等の感染拡大防止や予防に努めた。今年度は全国的に大流行しており、継続的に予防対策をとった。
	施設点検及び清掃時の点検を定期的に行い、改善が必要な箇所の早期発見に努め、学校の衛生環境の充実を図る。	・事務部と連携し、定期的な校内点検を行う。（月１回を目標とする）	A			・２学期以降、事務部と連携して計画的に実施した。今後も学習環境や施設設備の点検及び衛生環境の充実に関係分掌等と連携しながら実施する。
	支援を必要とする生徒に対して、情報のとりまとめを行い関係分掌と連携した支援に努める。	・迅速なケース会議、教育相談会議の開催に努力し、学年部、ＳＣ、ＳＳＷと連携し個別の支援が必要な生徒の支援内容の共有化を図る。	B			・学年部及び関係分掌と連携を取りながら、ケース会議・教育相談会議を実施した。外部機関と連携することで、支援内容の共有化を充実することができた。
事務部	安心・安全管理の徹底を進める。	・保健部やみずなぎ等他の分掌と連携し適切な学校教育環境の維持に努める。	D	D	C	・安心安全な学校環境を維持するためには毎月の安全点検のさらなる充実を図る。
	広報活動の支援を行う。	・積極的な広報に努めるため、次の事項について重点的に取り組む ①就学支援の他、学校環境の変化などをホームページで発信する ②公金管理が伴う校内外実習を積極的に支援する ③広報に係る提案に積極的に取り組む	B	B		・就学支援、生産物売り払い収納、広報の企画など全般的に積極的な取組ができた。 ・残念ながら、上記と関連するが、学校環境の広報については不十分で、次年度への課題となった。

令和6年度京都府立海洋高等学校　学校経営計画（スクールマネジメントプラン）　実施段階

分掌・教科等	重点目標	具体的方策	評価			成果と課題
みずなぎ	全ての実習の安全･安心の徹底	・実習時に集合操練、救急コール携帯の徹底。	C	C	C	・実習初日に集合操練を実施し、各部屋の非常脱出口の確認、救急コール携帯を徹底した。今後、火災操練、非常操舵、退船操練を実施予定である。
	小・中学生体験乗船の増大	・組織・運営と打合せ体験乗船の増大させる。	C			・臨時検査28日（ほぼ上限使用臨時検査年30日）、体験航海32回、参加校小・中学校10校、幼稚園２園であり、体験回数は多いが、参加校が少ないので、HPの活用等で増やしたい。
寮・下宿運営部	定員増加に対応する寮運営の確立	・寮の定員増加及び女子舎室新設に伴う、寮運営の改善及び確立を目指す。	B	B	B	・寮全体の施設・設備の整備や清掃など、普段の舎監業務では手が届きにくい業務を、半日舎監を導入して改善した。 ・舎監室前ロビーにも食事用の椅子と机を準備し、食堂内の混雑緩和を図るとともに、配膳も分かりやすくした。 ・定員増加に伴い、改めて黒潮寮防災訓練を実施し、在寮生徒の安全確保並びに掌握方法を確認した。
	Ｃラーニングを活用した寮・下宿運営の効率化	・積極的にＣラーニングを活用し、業務の効率化を目指す。	A	A		・以下の項目について、Ｃラーニングを活用した。 １　夏季休業中の生徒動静の確認 ２　下宿管理者アンケートの実施 ３　食数管理など寮運営に関する注意事項などの周知 ４　冬季休業中の生徒動静の確認 ５　年度末の３年生の動静の確認
	寮生・下宿生の効果的なＩＣＴ活用の推進	・寮生・下宿生の、ＩＣＴ機器の効果的な活用を推進する。	B	B		・食堂でのiPad利用について、学習目的であることを再確認し、改めてルールを設定した。 ・デジタル化が進む社会で、ＩＣＴ機器と適切に関わっていける力を付けられるよう、スマートフォンの預かり指導を任意とした。 ・寮生向けにＣラーニングのドリル機能で資格の過去問題に取り組めるよう設定し、資格取得を積極的に行うよう促した。
第１学年部	・生活習慣や学習に向かう姿勢を確立させる。 ・学校生活を通して、社会人として必要な資質やコミュニケーション力を身に付けさせる。 ・保護者等との連携を密にし、信頼関係の構築に努める。	・学年の生徒状況や課題に応じ、学力伸長の取組を実施する。	A	B	B	・１学期は朝学習として登校後から８時35分まで自主学習に取り組んだ。 ・２学期末・学年末考査１週間前から、朝学習を実施した。
		・部活動に加入し、社会で必要な力を付ける。	B			・年度末における部活動加入率は91.6%であった。加入率や活動率が低下しないように、部活動顧問と連携を取り、状況に応じて声掛け等を行うとともに、参加していない生徒には放課後の過ごし方や他の取組等に参加できるよう声掛けを継続する。
		・家庭連絡を密にする。	C			・保護者等面談・連絡の回数（１人３回以上63人※学年全体の88%） ・今後も保護者等との連絡・面談を積極的に行い、信頼関係の構築に努める。

令和6年度京都府立海洋高等学校　学校経営計画（スクールマネジメントプラン）　実施段階

分掌・教科等	重点目標	具体的方策	評価			成果と課題
第２学年部	教科・分掌等と連携を図り、学習に関する基礎的環境整備と個に応じた指導に努める。	・学力向上の取り組みを行い、成績上位者数の増加を目指す。	B	B	B	・成績上位者の人数増加を目指すことも大切だが、欠点総数も多く、学習が苦手な生徒への手立てが急務である。生徒への授業やそれ以外の学習状況の把握や生活指導等、保護者との連携を深め、改善を目指したい。
	希望進路実現に向け、保護者と連携を図り、丁寧な指導を心掛ける。	・２年学年末までに希望進路の決定100％を目指す。	B	B		・具体的な進路先名が決まっている生徒数が58名。方向性が決まっている生徒が14名。未定生徒が６名。約92％の生徒が具体的な進路先や方向性が決定している。未定生徒へは面談や保護者連携を行い、今学期中には希望進路先の決定に近づけたい。
第３学年部	希望進路の実現	・関係分掌・学科・コース等と連携しながら、希望進路を実現させる。	A	B	B	・第１志望合格を果たした生徒は70名（92%）。進路指導部、個別指導担当者により丁寧かつ粘り強い指導を進めることができた。
	学習習慣・成績の維持・向上	・進路決定後も、授業、家庭学習等、学習に向かう姿勢を維持、向上させる。	B			・進路が決定した後に、いかに学習意欲を向上させるかが課題として残った。
BYOD運営部	・一人一台端末導入に係るハード面、ソフト面の環境整備を行い、ＩＣＴを円滑に利用できる学校づくりに取り組む。 ・ＩＣＴの利点と危険性を理解し、教職員が教育の質の向上に利活用できる知識と技能の向上に取り組む。	・端末活用ガイドブックの改善等、生徒が端末を安心・安全に利活用できる環境整備に取り組む。	B	B	B	・端末活用ガイドブックを配布し、端末の管理方法を指導した。
		・MDMの廃止に伴い、端末の活用方法がさらに広がるため、授業や実習における活用方法等を生徒へ示す。	B	B		・授業や実習で端末を使用し課題に取り組む等、有効に活用できた。今後も学習に繋がるアプリ等を示し、生徒の学力向上に繋げる。しかし、引き続き学習端末としての正しい活用方法を指導する必要がある。
		・BYOD運営部の定期会議で、教育の質の向上や働き方改革に役立つ研修を行い、教職員のＩＣＴ利活用に関する資質と能力を計画的に向上させる。	B	B		・府教委からの研修用動画を紹介し、教職員の端末活用スキルを向上させた。また今後も授業の質や働き方改革に繋がるような活用方法を模索していきたい。

令和6年度京都府立海洋高等学校　学校経営計画（スクールマネジメントプラン）　実施段階

分掌・教科等	重点目標	具体的方策	評価			成果と課題
海洋科学科	コロナ禍以前の教育活動を更新するとともに、「個別最適な学び」や「協働的な学び」を一体的に充実させ、授業・実習に緊張感を持って臨む態度や姿勢を育成する。	・授業・実習を大切にし、学習習慣を身に付けさせる。	B	C	B	・卒業後、進級後の生活が良好にスタートさせられるよう、指導を続けたい。
		・資格・検定試験の受験指導を充実させる。	D			・資格・検定試験の受験者数はのべ136名であった。 計画的に学習を進められるよう、次年度も継続して指導したい。
	高校卒業後の進路を見据えた自己の在り方生き方、ライフプラン等を描かせる。	・キャリア教育や外部機関等とのつながりを充実させる。	B	B		・学科生徒全員での取組として、漁業士、水産庁職員・女性漁業士、卒業生との交流等を実施した。その他、希望者のみの取組として地球環境ユースサミット、障害者海釣り前日イベント等には積極的な参加があり、視野を広げる機会を多く持つことができた。
航海船舶コース	専門性の高い資格・検定に挑戦することにより、主体的に学習に向かう姿勢を身に付けさせるとともに、専門性の涵養に努める。	・ＩＣＴ活用や補習等を推進し、自ら学ぶ姿勢を育成する。 〈資格毎数値目標〉 海技士（三級２名、四級５名）、第二級海上特殊無線技士10名 小型船舶操縦士（一級６名、二級９名）、漁業技術検定10名	A	A	A	・各合格者数／受験者数 ・海技士（三級）１／６名 ・海技士（四級）６／33名 ・第二級海上・陸上特殊無線技士 15／22名 ・小型船舶操縦士（一級）８／９名 ・小型船舶操縦士（二級）11／13名 ・漁業技術検定 12／16名 ・今年度の全般的な合格率は改善している。次年度も補習等を行い、取得支援を継続する。
海洋技術コース	・生徒の専門性の向上 ・関連進路先への就職、進学	・海洋技術コースに関連する資格取得・検定合格を通じて、生徒の専門的な知識や技術の習得を図る。また、定期的に進路に関する面談を行い、海洋技術コースに関連する進路指導に繋げる。	B	C	B	・海洋技術コース関連の資格、検定合格率は96.6%だった。２月に２年生が受験した潜水士国家試験は合格率80%であった。次年度に向けて合格率をさらに向上させられるよう、指導方法を改善していきたい。
		・進路に関する面談を充実させる。	C			・３年生に１回、２年生に１回実施。２年生には今後の進路決定に向けて積極的に関わっていきたい。
	・外部との連携強化 ・外部に向けた研究活動の発表	・丹後半島沿岸海域の環境保全及び地域振興を目標とした活動を展開する。また、研究活動の成果をさまざまな場面で発表し、海洋技術コースの研究活動を発信する。	B	C		・環境保全及び地域振興に関わる実習等を８回実施した。校外実習が多く負担が大きいため、取組のタイミングや回数について今後精査していく必要がある。
		・研究活動に関連する外部発表を積極的に行う。	D			・１回実施。販売イベントで堆肥に関する掲示を行った。今後、外部発表の機会を一層増やしていきたい。
	・教員自身の専門性の向上 ・教員間での知識・技術の伝承	・外部講習等の活用により、教員の専門性向上を図るとともに、コース内研修による知識・技術等の伝達及び向上に努める。	A	A		・校外研修・講習等に６回参加。教員の専門性向上のためにも、積極的に外部講習等に参加していきたい。
		・校内研修を実施する。	A			・３回実施。知識・技能を持つベテラン教員から、若手教員へと知識・技術の伝達を確実に行っていくため、日々の業務の中でより一層研修の機会を確保していきたい。

令和6年度京都府立海洋高等学校　学校経営計画（スクールマネジメントプラン）　実施段階

分掌・教科等	重点目標	具体的方策	評価			成果と課題
栽培環境コース	学習した専門的な知識と技術を定着させ、社会で活躍できる資質と能力を育成する。	・増養殖に関わる資格取得を推進し、知識・技術の修得に繋げる。 （小型船舶１級･２級、栽培検定１級･２級、漁業技術検定、潜水士等）	B	B	B	・資格・検定の取得総数は57個、平均取得数は3.８個であった。小型船舶操縦士や潜水士、栽培漁業技術検定や漁業技術検定等の幅広い資格取得に励んだ。しかし、取得個数に個人差が大きく、課題となっている学習習慣の定着や基礎学力の向上を叶えるために、教科指導の更なる改善が必要である。
	個に応じた指導を行い、希望進路を実現させる。	・コース面談を行い、希望進路や生徒個々の状況を把握し、進路実現や課題解決に必要な指導や助言を実施する。	B	B		・面談を行う中で、希望進路や学習や生活上の課題等を把握し、必要に応じて適宜関係分掌と連携して対応した。また、学習意欲の向上や社会参画への意識向上のために、漁業現場の見学やインターンシップに取り組んだ。希望進路実現と個に応じた指導の実現のために、引き続き状況把握に努めていく。
	先進的な増養殖技術や、ＩＣＴを活用したスマート水産業について学習させ、次世代を担うために必要な知識と技術を習得させる。	・外部講師を招いた学習や、プログラミング及びＩＣＴ機器を用いた増養殖技術について学習する。	A	A		・水産庁主催のスマート水産出前授業を２回実施したことを始め、連携協定を締結している企業の支援を受け本校に適したＩＣＴ・IoT教材を作成した。 ・各種取組で得た知識や技術を探究活動で活用し、増養殖に関わる見方・考え方を深めることができた。 ・再現性のある教材を整備するために、マニュアル等の整備に取り組む。
食品経済コース	・高校生レストランの活性化を目指し、生徒の自己有用感を育む。 ・関係機関との連携を推進するとともに、地域活性化につなげる。 ・コース内での研修を十分に行い、生徒の希望進路実現を目指す。	・コンテスト・イベント等に参加し、自己有用感、主体性を育む。	A	A	B	・11回参加（栗田駅100周年イベント、PTA連合会近畿大会、うまいもん甲子園、和菓子甲子園、プレゼン甲子園、スイーツコンテスト、食品技能コンテスト、高校生料理コンクール、第35回まいづる魚まつり、第36回ＫＹＯのあけぼのフェスティバル2024、府民交流フェスタ） ・昨年度よりもイベント参加が増え、生徒に自己有用感を持たせることができた。
		・地元の低利用資源を活用した高校生レストランやこども食堂を実施す	C	C		・７回実施 宮津でのレストランを実施予定だったが、９月からの改修工事により実施できなかったため、回数が少なくなった。
		・定期的に研修会を実施し、知識・技能の伝承を行う。	A	A		・５回実施 今後も知識・技能の向上に努めたい。
		・京都府内関連企業への就職を推進する。	B	B		・就職希望生徒のうち75%が京都府内関連企業へ就職した。

令和6年度京都府立海洋高等学校　学校経営計画（スクールマネジメントプラン）　実施段階

分掌・教科等	重点目標	具体的方策	評価			成果と課題
国語科	基礎学力の定着と、国語に対する関心・意欲を高め、すべての教科の基礎となる国語力の向上に努める。	・漢字検定の合格率を高めるため、模擬試験の実施や課題プリントの配布を行い、受検者の学習意欲を高め、学習方法の指導を行う。	D	B	B	・合格率は25.1%であった。２回目の漢字検定に際し、課題プリント等の配布を行った。漢字学習を独立させるのではなく、国語の授業と関連付けていくことで、学習意欲を高められるのではないかと考える。
		・読書活動の充実を図るため、下記の取組を行う。 ①図書館オリエンテーションの実施 ②夏課題・春課題での読書レポート ③図書館を活用した授業展開（探究活動） ④読書アンケートの実施 ⑤探究活動につながる書籍やウェブ上の情報活用についての指導 ⑥文章の引用についての指導 ⑦週末課題での読書指導の実践	C	C		・読書活動推進のため、さまざまな活動を行った。①②⑤⑥⑦については実施済みである。ただし、生徒の実態調査をせずに活動のみを進めており、実際の活動がどのように生徒の読書活動につながったのかは不透明である。近年、iPadの使用により、活字離れがより一層深刻であり、一冊の本を読み切ることが難しい生徒が多いという肌感覚があるため、生徒の実態調査と関連付けての活動を行うことで、より効果的な読書活動推進につながると考える。
		・指導と評価の一体化を目指し、下記の取組を行う。 ①評価シートを学期の初め毎に準備し、教科内で共通認識を深める。 ②生徒の自己評価と学習指導を振り返り、授業改善に役立てる。 ③生徒が自己調整を行えるよう、振り返りシートを活用する。 ④パフォーマンスに関わる評価をルーブリック表を用いて行う。	B	B		・評価については、おおかたの取組が実施できた。今後は、実践のみならず、評価を通して生徒の学習意欲を高めたり、教員の授業改善につなげたりと、本質的な活動に取り組みたい。
地歴・公民科	地歴・公民科に対する関心・意欲・態度を醸成することで、国際社会で生きる日本人としての意識を涵養し、確かな学力を身に付けさせる。そのために、思考力・判断力・表現力を高める指導力を向上させ、主体的・対話的な学びにつながる授業改善を行う。	・ニュース時事能力検定準２級・３級における合格率を向上させる。	C	C	C	・６月実施の第１回目の検定は、準２級は０／３、３級は３／３という結果であった。11月実施の第２回目の検定は、２級は０／１、３級は３／４という結果であった。受検者を増やすとともに準２級以上の対策を図りたい。
		・定期的な小テストの実施やきめ細かな提出物などを通じて、学力定着に取り組み、考査における平均点向上を図る。	C	C		・１・２学期の２回の考査の平均点は全学年ともにおおむね50点台であった（２・３年生の１組は60点台以上）。全ての講座で60点台に達するように取り組んでいきたい。課題などの提出状況が２学期以降は悪くなっているので、対策が必要である。
		・実践的な発表授業を実践し、生徒自身の自発性や考える力を高める。	D	D		・１学期は、大型の発表会を行えなかったが、２学期以降は改善できた。
数学科	・生徒一人ひとりに合わせた指導と学習形態を確立することで基礎学力の定着に努め、思考力・判断力・表現力を伸ばすとともに、主体的に学習に取り組む態度を育成する。 ・数学検定の受検を促し、数学への興味・関心と資格取得に対する意識を高める。	・以下の４項目の達成を目指す。 ①成績不認定生徒０名 ②家庭学習を習慣化させるための指導法の確立 ③観点別評価の年次進行に備えて、教科内での情報の共有 ④数学検定の合格率の向上	B	B	B	・教材研究を重視し、日々の課題を充実させることで家庭学習の習慣化を目指した。 ・数学検定受検の機会を２回確保し、全体の受検者は13名で準２級合格が３名、準２級１次試験のみ合格を４名出すことができた。 ・年間を通じ、成績不振生徒への指導を粘り強く継続し、改善に努めた。

令和6年度京都府立海洋高等学校　学校経営計画（スクールマネジメントプラン）　実施段階

分掌・教科等	重点目標	具体的方策	評価			成果と課題
理科	理科の授業を通じて論理的な思考力・判断力・表現力の醸成に努める。そのために、BYODに対応したＩＣＴ教材の推進や観点別評価に対応した授業づくりを推進する。	・生徒すべてが、個人端末のiPadをもつため、以下の取組を行う。 ①iPadを活用した課題提出の取組 ②プリントなどの教材をC-ラーニングに置き、各自が復習できる環境をつくるとともに、取組具合を点検する。 ③実験や観察を通して、なぜそうなるのかを考えたり、意見交換したりする場　面を設定し、コミュニケーション能力や論理的思考力を育てる取組。 ④教科書の二次元コードから見ることができる実験動画等を活用し、学習内容の理解につなげる取組。また、それを課題とし、動画を見て答えるプリントへの取組と提出による主体的な学びの機会を与え、その評価を行う。	C	B	B	・①と②は授業では取り組めなかった。①については３年生の補習で試みたが、時期が遅かったせいか、生徒の取組時間は少なかった。②についてはここ数年間の課題になっているので、試みたい。③は実験を行った科目では時間をとって取り組めた。化学では仮説実験授業の資料を要約した資料を用い実験と考察を行った。生徒は間違えることもあるが、自分の意見を言い、実験による答え合わせによって理解を深めることができた。④の二次元コードの活用は化学基礎の分子について表示し、利用できた。生徒にも家庭学習で見るように指示はできた。他の分野でも紹介することはできた。プリント作成はできなかった。
		・振り返りプリント、授業プリント、授業ノート、問題練習ノートなど、定期考査以外の評価材料を増やし、観点別評価の材料を集め、評価に生かす。	A			・化学基礎は24回、物理基礎は30回、生物は授業プリント63枚（内６枚は練習問題付き）、練習プリント４枚、科学と人間生活は授業プリントが33枚、生物基礎は22枚、化学は30枚であり、目標は達成できたと考えている。実験は生物基礎で８回、化学で５回、化学基礎で１回、物理基礎で１回、生物で１回実施した。生物、物理基礎、化学基礎では実験動画の視聴を行った。授業実験が少ないことが課題である。科学と人間生活は、光や波の分野で演示実験を行った。中間評価以降、冬季休業中の課題も課しており、評価材料は集められていると考えている。今後も評価材料集めに取り組みたい。
保健体育科	保健体育科会議を積極的に実施し、保健体育科教員の資質向上や同僚性の推進に努める。	・保健体育科会議、打ち合わせの開催数	C	C	C	・11回実施し、実技研修会の伝達や観点別評価についての確認等を行った。
	保健体育科の取組をホームページに掲載し、本校の教育活動の発信に努める。	・ホームページ掲載回数を増加させる。（昨年度11回）	C	C		・12回掲載し、授業内容の説明や掲載する写真枚数を増やし内容の充実を図った。
芸術科（美術）	生徒１人１人が作品と向き合う中で、高い意識をもって制作に取り組めるよう、授業規律の確保と授業態度の向上に務める。	・計画的に制作活動に取り組ませ、作品を期限内に完成させ、提出させる。	A	A	A	・計画どおり順調に進めることができた。生徒が高い意識をもって制作に取り組めるよう、具体的な指示を出し、生徒の進捗状況を把握し、指導することができた。また、期限内に作品を完成できるよう、生徒のペースを把握しながら指導を行った。

令和6年度京都府立海洋高等学校　学校経営計画（スクールマネジメントプラン）　実施段階

分掌・教科等	重点目標	具体的方策	評価			成果と課題
家庭科	生活的自立の能力を形成するために、自ら考え判断できる力と、他者と共存できる力を育成する。	・家庭生活に関する基礎知識の学習プリント記入状況を確認し、学習内容の定着を把握する。	B	B	B	・プリント学習の状況を定期考査の際に確認した。提出率は90%であった。毎時間記入状況を確認し、声掛けを励行することで、学習内容の定着を図った。
		・自立に向けて対話的・体験的に学ばせる取組を行う。	B			・丹後教育局から、赤ちゃん人形・胎児人形、妊婦体験グッズをお借りし、体験的な取組を実施した。２学期は水産海洋基礎とコラボレーションでの調理実習を実施した。長期休業中（夏・冬）は、家庭での調理レポートを課題とし、自立に向けて対話的・体験的に学ばせる取組を４回実施した。
英語科	生徒が主体的に学びに向かう姿勢を育み、基礎力の定着を図るとともに、４技能５領域を意識した学習指導を行う。	・プレゼンテーション・スピーキングテストなど、パフォーマンス課題を課すことにより、生徒の英語学習へのモチベーションを高める。	A	A	A	・計画どおり実施できた。第１学年のテーマは、自己紹介や興味のある職業、おすすめの店といった身近な話題とし、取り組みやすくしている。また、海洋科学科では、伝統文化やテクノロジーといった、より発展的なテーマでプレゼンテーションを行い、自分の考えを英語で表現する機会を大切にしている。
		・４技能５領域の英語力をバランス良く高めるため、実用英語技能検定の受検を奨励し、合格者数の増加を図る。	A			・２次試験の前の面接練習を十分行うように努力している。準２級について、第１回では、３名が受検し３名が合格。第２回では、６名が受検し２名が合格。現時点での合格率は55%。第３回には、準２級を15名が受検した。